

XenosagaI・II - 第十三話 陥穽 - Falle -

U.M.N. 管理センター

Jr.：今日はいよいよ、モモの調査の日だ――
さてと、ゲストを迎えに行かなきゃな。

ガイナン：――遅いぞ。そろそろ到着する時刻だな。

Jr.：わりい。

しかし、小委員会の専門委員自らが立会いとはな――

ガイナン：それだけ重要だということだ。委員会にとっても、彼女にとってもな――

モモ：―――あ！

ママ――

ユリ・ミズラヒ：お久しぶりね。

ガイナン：お元気そうで、なによりです。

ユリ・ミズラヒ：過日の天の車の一件――御尽力を感謝しています。

小委員会を代表して、御礼を言わせてください。

ジギー：モモのおかげでもあります。たいした活躍でした。

ユリ・ミズラヒ：――そう、よく頑張りましたね、モモ。

モモ：ママ――

ユリ・ミズラヒ：資料をまとめたいの。落ち着ける部屋を用意していただけると、ありがたいわ。

Jr.：―――よ・ろ・こ・ん・で。

ユリ・ミズラヒ：―――――

―――モモ。

モモ：――はい。

ユリ・ミズラヒ：事態が落ち着いたら――一緒に暮らせるといいですね。

モモ：！　――は、はい！

Jr.：（――――）

ジギー：――よかったな。

モモ：――はい。

シェリィ：では、モモ様、こちらへ――

モモ：はい。

陥 - Falle - 罅

ユリ・ミズラヒ：あなたが解析の責任者でいてくれて、心強いわ、ルベド。

Jr.：――――――

ユリ・ミズラヒ：どうかしたかしら？

Jr.：ユリさんこそ、どうしたんだよ。

ユリ・ミズラヒ：――なにが？

Jr.：いきなり、モモへ優しい言葉をかけたりして――

ユリ・ミズラヒ：不自然かしら？

家族の温もりという刺激にモチベーションが喚起されるよう、
ヨアキムは、あのレアリエンを設計したのよ。

ならば、調査を円滑に進めるため、その刺激を与えてやるのは職務上、必要な行為じゃないかしら。

Jr.：そういう返事が返ってくると思ったよ。

冷たい人間[ひと]の振りをして、後で傷つくのは――ユリさんの方なんだぜ。

ユリ・ミズラヒ：――――――

――あのレアリエンを創ったのは、ヨアキム――

私は、それが怖いのよ――

Jr.：俺は、ヨアキム・ミズラヒがどんな人物だったのか、直接的には知らない。

なにを意図して、百式を生み出したのか——もだ。

——けど、俺はサクラと、ある約束をした。

ユリ・ミズラヒ：！　　——サクラと？

——十四年前に？

Jr.：——ああ。だから俺は、モモを見た目相応の子供として扱うつもりだ。

ユリ・ミズラヒ：——なぜ、いまになって、その話を？

Jr.：ずっと話さないつもりだったんだけど、いまのユリさんを見てたら、つい——な。

ユリ・ミズラヒ：そう——

どんな約束をしたの？　聞いてよければ——

Jr.：ママと妹を、見守ってくれ——って。

ユリ・ミズラヒ：——！

Jr.：ユリさん、また笑ってくれよ。サクラもきっと、それを願ってたはずだぜ。

ケイオス：——ミズラヒ博士、モモちゃんがお話があるみたいです。なんだか、願いがあるみたいで——

ユリ・ミズラヒ：——わかりました。

——

ルベド、さっきの話——私なりに、理解したつもりです。

——ありがとう。

ケイオス：おじゃま——だったかな？

Jr.：けっ、そんなじゃねーよ。

それより、シオンはどうだった？　あれからも、古本屋通いしてるんだろ？

ケイオス：うん、心配はないと思う。

あの家族はいろいろ複雑なようだけど、シオンにはアレンさんもいるしね。

Jr.：アレンだあ——？　まあ、案外あいつヤツの方が、気晴らしには向いてるかもな。

ケイオス：ひどいなあ。

Jr.：複雑な家族、か——ま、俺もあんま人のことは言えないか。

さてと、そろそろ行くか。

ケイオス：あれ、メンテナンスルーム、使われてるみたいだね。

Jr.：ああ、おっさん用に予約しといたんだけど、この声は――

ユリ・ミズラヒ：――調子はどう？

ジギー：悪くありません。ミズラヒ博士――

ユリ・ミズラヒ：モモに、頼まれたのよ。

ママは高名な科学者だから、サイバネティック工学にも詳しいでしょうって。

ジギー：いや、調整は――

ユリ・ミズラヒ：私は若い女でもない、気にしないで。

”高名な科学者”ね――どちらかというと、悪名だと思うけれど。

ジギー：貴女はモモを苦手になっているようだが――なぜです？

ユリ・ミズラヒ：娘と同じ顔とした、娘ではない”もの”を――愛せる？

ジギー：難しい質問だ。

ユリ・ミズラヒ：見た目だけ娘に似せても、魂は戻らない。

星団中に散らばった百式たち――あの姿は、絶間なく私に娘の死を突きつける。

ジギー：百式をいまの姿にしたのは、御主人だったとか――

ユリ・ミズラヒ：ええ――あなた、子供は？

ジギー：息子が一人――元気で利発な子だった。

ユリ・ミズラヒ：ごめんなさい――百年前のことですものね。

ジギー：それが眼前で起きたことでなければ、今頃――忘れられていたかもしれない。

ユリ・ミズラヒ：――それが、あなたが自殺した原因？

ジギー：ああ――そうだ。

ユリ・ミズラヒ：私も――娘が死んだとき、そうすればよかったのかもしれない。

でも、悲しみの占めるべき場所を夫への怒りが埋めた――

ジギー：多分、貴女は強い女性[ひと]なんだろう。

ユリ・ミズラヒ：違うわ。――意固地なのよ。

ジギー：ミズラヒ博士、これは私見だが――

貴女には娘が二人いたのだと、思うことはできないだろうか。

ユリ・ミズラヒ：！

（”ママと妹を見守ってくれ”

あの子は、そう言っていた――)

――

ジギー：一人は亡くなって、一人はまだ生きている――そう思うことは、難しいだろうか。

ユリ・ミズラヒ：モモを娘のコピーではなく、一人の個人として扱え――と言うのね。

随分と難しい課題を出すこと――

ジギー：検討してみてほしい。

ユリ・ミズラヒ：――考えてみるわ。

私、そろそろ行かないと――

ジギー：調整、ありがとう。

ユリ・ミズラヒ：どういたしまして。

ジギー：――

――

――中に入ってきたらどうだ。

盗み聞きとは、趣味が悪いな。

Jr.：まあまあ、悪気はないんだから。――でもよ、おっさんもなかなか隅に置けないよな。

ジギー：なんのことだ？ 言っていることの意味が理解できないが。

Jr.：――ったく、素直じゃないね。

ジギー：それよりも、そろそろモモの解析が始まる時刻だと思うが、

責任者がこんなところで油を売っていてもいいのか。

Jr.：――あ やべえ、急がないと。

ケイオス：うん、解析室へ急ごう。

Jr.：あつぶねー、なんとか間に合ったみたいだ。

メリィ：緊張せんでもええで、モモちゃん。今日のはあくまでも、本格的な解析の下準備やさかい。

モモ：はい、頑張ります。モモ、自律調整型だからベッドでの調整は起動以来です。

こうやって調整を受けていると、ジギーみたいですわね。

ジギー：大丈夫、怖がる必要はない――

百式：解析のため、模擬人格層を機能停止します。

一時的に擬似感情表現、及び抽象認識機能が停止しますが、心配なさらないでください。

モモ：擬似、感情――

百式：擬似人格はあくまで対人オブションですから、観測機能そのものにはなんの影響もありません。

モモ：（モモの心は――ただの、オブション機能――）

ジギー：モモ――

百式：人格層、スリープ完了――機能停止します。

モモ：あ、あ――

シェリイ：――ヘルマー様。

ヘルマー：様子はどうなのだね。

シェリイ：メリィ――

メリィ：分析準備、なかなかはかどれへんみたいです。

かなり複雑な障壁がある上、こないだのハッキングで、破損してるルートがあるとかで――

Jr.：破損してるルート――そうか、いま――あいつ、人格層停止されてるんだな。

メリィ：はい、なんかひどいことしてるみたいで、胸が痛みますわ。

うちらも――旧ミルチアで薬物投与されてた頃、自分が空っぽみたいになって、ごっつ嫌でしたもん。

Jr.：そうだよな――

メリィ：人間みたいな、図太い生物でもそう思うんやもん。

自分の心が嘘モンや言われたら、めっちゃ傷つくと思いますわ。

Jr.：俺たちの心だって――神様がつくった、オモチャかもしれないぜ。

シェリイ：ちび様――立ち会われなくてもよろしいのですか。

Jr.：――見ていられないんだ、怖くて。

シェリイ：ちび様――

Jr.：臆病者だから、さ――

百式：百式プロトタイプ、精神障壁を確認。アプローチスタート――帯域確保、パーティション開放。

カウント始動――5、4、3、2、1、メインパルス――シグナル受信。

人格層のチェック――――320 から 480 までスキャン終了。

メリィ：もうちょっとや、モモちゃん。あとちょっとでつらいの終わるさかいな。

終わったら、楽しいとこ遊びに行こ。

百式：最終障壁のデコードパターンを解読、プロテクトの全解除に入ります。

トランスフェクションスキャン――各種モニタリング、正常。

メリィ：モモちゃんー？

モモ：だーめー

百式：電位パルス、シグナル拒絶！ 脳波周波数上昇！

メリィ：モモちゃん、どないしたんや！ なにか言いたいんか！？

百式：第15障壁へのアプローチ続行中、再スキャン実行ー

モモ：こーれーはーワナーナー

百式：きゃあっ！

メリィ：あー！

ユリ・ミズラヒ：これはー

@：不可視領域から、高速言語による大量の干渉が発生！

防壁ロジック崩壊68%ー緊急遮断！

ー拒絶されました！

シグナルに異常発生、脳波周波数安定しません！

U.M.N. ネットワークへ端末が開放されています！ 侵入経路、特定できません！

深層領域内で軸策の多重連結が進行中ー

大規模なホログラフィック・ネットワーク、新規構成されています！

ジギー：ミズラヒ博士、これはー

ユリ・ミズラヒ：システムを一つ一つ解析してもなにも見つからない筈ね。

各層自体は解像度の低い断片ー散りばめられた記憶の欠片[かけら]のようなもの。

すべてが同時に活性化して、初めて全体像を結ぶー

ヨアキムが仕掛けた、壮麗な騙し絵ー

@：外部からの強制干渉、感染経路の特定できません！

ユリ・ミズラヒ：遮断再実行！ 外部ハッキングからの防衛ロジック、再構築しなさい。

@：はい、防衛ロジックの再起動、試行していますー

拒絶されました！！

ジギー：ーモモ！

メリィ：モモちゃん！

モモ：ーご・め・ん・なーさーい、モモー気・付・かなーかったー

ガイナン：いかん、これはー！

ユリ・ミズラヒ：自己展開するトラップ？

これはヨアキムの意図ではない、もっと新しい――まさか、”天の車”での侵入時に！？

ガイナン：アルベドの罠か！

@：防壁ロジック崩壊まで、あと20秒！このままでは、すべてのデータが流出する恐れが――

ジギー：ミズラヒ博士、なにをする気です。

ユリ・ミズラヒ：非常用の制御コードを使って、データを破棄します。

ジギー：馬鹿な、そんなことをしたら、モモが――！

ユリ・ミズラヒ：仕方ありません。”Y資料”が敵勢力の手に渡る事態だけは、なんとしても避けなければ。

ジギー：ミズラヒ博士――

ユリ・ミズラヒ：（このコードを打ち込めば――Y資料は守られる

そして、モモも――――

――――――

迷う必要はないはず――――

――――モモ！）

@：システム内部から、防壁ロジックへの干渉発生！

ロジックモードを変更します。モード変更、障壁展開。

――再実行不可能！

ユリ・ミズラヒ：――モモ！

@：ネットワークに独自の障壁が展開、こちらの制御を受けつけません！

――強制切断！

ミズラヒ博士、ホログラフィック・ネットワークが自己崩壊を始めました！

展開データ、消失していきます！

ユリ・ミズラヒ：そんな、私はまだ――

@：緊急コード、拒絶――切断できません――

ジギー：どういうことだ――

ユリ・ミズラヒ：モモが――モモが自ら、神経回路を断って、記憶を分散させているのよ。

ヨアキムに託されたものを護るために――精神を自爆させるつもりだわ――

ジギー：なんだと――！

@：ネットワークへのリンクルートが断絶していきます。

ユリ・ミズラヒ：モモ――

@：百式プロトタイプ、システム機能停止しました――

ジギー： モモ！

ユリ・ミズラヒ： モモ――

？？？『――やあ、贈り物は気に入ってもらえたよな。』

ガイナン： アルベド――

アルベド『ミズラヒの遺産は、ペシェが体を張って護り抜いたようだな――

健気なもんだ、どんなに愛らしくとも、所詮は木偶[でく]人形に過ぎないものを。

ミズラヒの戯言[たわごと]に乗せられ、ヒトになる奇跡を待っている――』

ジギー： 木偶[でく]人形、だと――

アルベド『ひゃはは――はっははは――

ひゃはははははは――』

ジギー： ミズラヒ博士、モモは――！

ユリ・ミズラヒ： 蘇生します。死なせはしないわ――

修復ナノユニット注入！ 素子活性剤シリンジを 12 本用意！

（今度こそ――助けてみせる。今度こそ――！）

ヴェクター二局

シオン： モモちゃんが、そんなことに――

Jr.『すまない、俺がちゃんとしていてやるべきだった――

（くそ、なにが見ているのが怖い、だ――俺は肝心な時に――）

ヘルマー『基礎機能は回復――いや、一命は取りとめたが、

人間の脳にあたる神経ネットワークが寸断された状態だ。

”Y 資料”を復元するため、ヴェクター三局の技術をお借りしたい。

事態はすでに、我々一自治体だけの問題ではなくなっている。

第二ミルチア政府として、君たちに公式な協力を要請したい。』

シオン： モモちゃん、お父さんの意志を守るために――

わかりました、ぜひ協力させてください。

私にとっても、モモちゃんは大切な友人です。

ヘルマー『――よろしく頼む。』

Jr.『――じゃあ、俺はこっちで待ってる。』

アレクサンダー：たいへんなことになりましたね。

シオン：まさか、あの天の車で、こんなトラップがしかけられてたなんて――
気づいてもよかったのに――ごめん、モモちゃん――

アレクサンダー：三局から人を手配するとなると、時間が掛かりそうですね。
それまで、モモちゃんが無事だといいんですけど――

シオン：――アレクサンダーくん、悪いけど三局に、機材の手配お願いできる？

アレクサンダー：それはかいまいませんけど――機材の手配？ まさか――主任？

シオン：――うん、私が行ってくる。このまま黙って見過ごせないもの。

アレクサンダー：やっぱり――

言うまでもないですけど、越権行為ですよ？

シオン：大丈夫、責任は私がとるわ。アレクサンダーくんには迷惑かけないから。じゃ、お願いね。

アレクサンダー：あ、ちょっと、主任！

――行っちゃった。ええい、こうしちゃられないぞ！

アレクサンダー：主任――待ってくださいよ、主任！

シオン：アレクサンダーくん？

アレクサンダー：機材の方は三局に発注しときました。あと、作業スケジュールも暫定的なものを組んでおきましたから。

シオン：ちょっと、私が行くって言ったでしょ。

アレクサンダー：大丈夫です。僕らが到着する頃には、準備は完了しているはずです。

シオン：アレクサンダーくん――

アレクサンダー：一人で行くなんて言わないでくださいよ。

僕だって、モモちゃんやみんなの仲間のつもりなんですから――

シオン：――わかったわ。急ぎましょう！

―― 

議員：どうのことだ、なぜ、いま――

移民船団が、第二ミルチアに対し艦隊を派遣する必要があるのかね。

議員：まあ、そういきり立つこともあるまい。彼らの言い分も聞いてみてはどうかね。

教皇セルギウス：発言の機会をいただき、感謝する。

――かつて、この宙域にミルチアなる大地が存在していた。周知のとおり、その大地は十四年前に起きた事象により呪われた過去として、人類最大の遺産とともに封印された。もともと、かの遺産は全人類の所有物であり、古の時代から我々、移民船団によって、管理されてきたものである。

議員：待ちたまえ、ゾハルは現在、評議会が定めた管理団体に預けられているのだぞ。

まさか、大いなる遺産とやらを独占したいだけなのではないのかね――？

教皇セルギウス：これは心外なことを――

独占を企んでいるのは我々ではなく、他にいと申しておるのです。

議員：まさか、それがミルチア政府だとでも、おっしゃるのですか？

教皇セルギウス：彼らは十四年前の事件をきっかけに自らの武力行使を正当化しつつあります。

そして、その力の象徴として天の車なる巨悪を出現させ、この世に紛争を再燃させようとした。

彼らの目的は紛争の混乱に乗じて旧ミルチアの遺物を、私欲のために利用することでありましょう。

我々は、おぞましき篡奪者であるミルチア政府に対し、遺物に関する旧来の自治権を主張するものである！

議員：先の件は、U-TIC 機関の犯行によるもので、ミルチア政府への嫌疑は、晴れたはずではないのかね。

ヴェクターからの証拠のデータもあると聞いているが――

議員：いや、ミルチア政府にヴェクターが肩入れしているというウワサもある。

あのデータとてどこまで信用できるものか――

議員：現にミルチア政府の代表がどこにもおらんではないか！

ヘルマー議員はどうしたのだ！ この件についての釈明はないのか――

教皇セルギウス：――――――

第二ミルチア

ヘルマー：すまない、いきなり押しかけたりして。

ジン：いえいえ、ご無沙汰しておりました、中將――

いや、第二ミルチア星系代表等議員とお呼びした方がよろしいですか。

ヘルマー：昔通りでかまわんよ、大尉。その方がしっくり来る。

――評議會をすっぽかしている、不良議員でもあることだしな。

それで、聞かないのかね。何の目的があって、私が来訪したのかを。

ジン：おおその見当はついてますよ。

ヘルマー：そうか――

ならば、単刀直入に言おう。大尉、君の力をふたたび貸してほしい。

――カナンは知っているな。

ジン：ええ、懐かしい名です。

ヘルマー：そのカナンに君が託したデータ、その正体を――真実の姿を究明したい。

ジン：あれは非合法に入手したものです。証拠能力は皆無ですよ。

ヘルマー：それでもかまわん。我々の真の敵が誰であるのか、それだけでも良い。

ジン：マーグリス大佐の背後にいた者、ですか――

ヘルマー：そうだ、そしてそれが――U-TIC 機関を復活させた存在に他ならないはずだ。

私は知りたいのだよ、大尉。

ジン：中将、いまの私はしがない古書肆[ふるしょし]です。

とても、中将のご期待に沿えるような――

ヘルマー：――大尉、先頃、ようやく例の資料の所在が判明した。

ジン：Y 資料――ですか？ 十四年間もいったいどこに――

ヘルマー：レアリエンの記憶素子だ。ヨアキム・ミズラヒは亡き娘に似せたレアリエンを創造し――

彼女の内に、最大の機密を封印したのだ

ジン：なるほど、近頃のきな臭い匂いは、そのレアリエンの目覚めが、銃爪となったわけですね。

ヘルマー：そうだ、陰謀術策や逃亡と追跡、――いまだ一部の人間が知るところとしかなくてはいいないが――

大火の火種は、確実にくすぶりは始めている。

ジン：ええ、私の妹も自分の身を焼き焦がそうとしています。

ヘルマー：そうか、そうだったな――

ジン：Y 資料が開放されれば、彼の地への道が開く――

ヘルマー：あの惑星へ至れば、カナンに託されたデータの解析も可能となる。

ジン：――それが何を意味するのか、ご承知の上のことなんですね。

ヘルマー：承知している。――そして、覚悟もな。

ジン：――――――

U.M.N. 管理センター

Jr.：――シオン！

なんだよ、てっきり三局の人間が来ると思ったのに。

これは一局の管轄の作業じゃないだろう？

シオン：うん、本来ならそうなんだけどね。場所も近いし、私の方が動きやすかったから。

もちろん、機材はすべて三局から転送済みよ。

技術的にはなんの問題もないから、安心して。

アレン：まったく、強引なんですから。いいですか、あとで三局に謝りに行ってくださいよぉ。

ケイオス：そういうアレンさんも、しっかり手伝ってるんですね。

アレン：え、いや、僕は一主任一人には任せられないし――

シオン：Jr. くん、そういうわけで、私たちもモモちゃんを助けたいの。私とアレンくんじゃ、頼りないかな？

Jr.：いや、アレンはともかくシオンが来てくれたのは嬉しいよ。きっと、モモもだ――

アレン：ちょっと、それはどういう――

Jr.：時間はそうない。準備が整い次第、――行くぜ。

シオン：――ええ。

モモちゃん――待っててね、もうすぐ――

もうすぐ、助けに行くから――